真下に落ちる流れ星

大岡俊彦

７５分、青春、ラブストーリー

【あらすじ】

宇宙飛行士の高野聡（たかのさとし・３０）は、プロポーズの指輪を宇宙ステーションから落とし、東京の空に「真下に落ちる流れ星」をつくろうとしている。

それは中学時代の転校生、下原凪（しもはらなぎ）への片思いの清算だ。彼女の３０の誕生日、彼氏がいなければ結婚してやると約束したことを、聡はまだ覚えているのだ。

中学時代天文部で、流星群の軌道計算ばかりしていた聡は、美人転校生の凪に魂を奪われる。

凪はクラスのイケメン美女軍団に誘われ、リーダー格の野々宮（ののみや）とつきあうことに。彼女はそれを「処世術」と冷めている。寄ってくる男を避けるためだと。

野々宮の元カノ祥子（しょうこ）が凪に嫌がらせを。聡は祥子の隠し撮りをして動画を合成、勝手にユーチューバーアクション女優に仕立て上げる。結果、祥子は大人気、いじめはぱたりと止んだ。

凪は利用価値があり、野々宮グループは高校生たちと乱交する「遊び」をしていた。そこから彼女を救う方法は、ボヤ騒ぎを起こして逃がすことくらいだ。

ひきこもる彼女を、聡は流星群の観測に誘う。真下に落ちた流星に奇跡を感じ、告白する。だが「あなたも他の男と同じなの？」と失望され、それきり彼女は転校してしまった。

聡は星の世界に逃げていた。凪は小説の世界に逃げていた。二人の共通点は、「もうひとつの世界がある」と信じていたこと。

宇宙ステーションに事故が起こり、船外活動で修理する間に、東京上空を過ぎてしまった。聡はあきらめて指輪を落とす。だが凪は新潟にいて、西の空に真下に落ちる流れ星を見たのだった。

【登場人物表】

高野　聡（たかの・さとし　１４）
天文部。宇宙飛行士を目指している。
（３０）　宇宙飛行士。

下原　凪（しもはら・なぎ　１３）
転校生。黒いカバーの小説をいつも読んでいる。
（２９）　翻訳業。

野々宮　日馬（ののみや・はるま　１４）
陽キャのグループの、リーダー。
遠藤　祥子（えんどう・しょうこ　１４）
野々宮の元カノ。

谷　龍太（たに・りゅうた　１４）
天文部。聡の親友。

ユウ　（１４）　野々宮グループ。
トキヤ（１４）　同。
マリ　（１４）　同。
ナルミ（１４）　同。
鷺宮　（１５）　上の学年のイケメン。
高校生男、女　野々宮の「客」。

先生（４０）
下原　千代子（４０）　凪の母。
スティーブ（３５）　聡の同僚。
ハンス（３５）　聡の同僚。

※　中学時代がメインですが、その時は、「中学生たちの目線」を表現するため、大人の顔は見えない（フォーカスやアングルで）にしたいです。

○国際宇宙ステーション、内

窓の外は、巨大な青い地球。
それを背景に、金色の結婚指輪。
宇宙飛行士の聡（３０）がスティーブ（３５）にその秘話を話す。

聡　「今夜零時ちょうど。このステーションは東京上空を、真東から真西に通過する。その瞬間、俺はプロポーズする」

スティーブ「ワオ」
スティーブは英語で喋り、日本語字幕。

聡　「この指輪を落として、『真下に落ちる流れ星』をつくるんだ。今年はしぶんぎ座流星群の当たり年で、東の空はそれで満杯だ。その中に、垂直な流星が落ちてくる」
地球の端は夕暮れから夜。
そこに流星群が降っているのが見える。
宇宙空間から見た流星群だ。

スティーブ「すごいプロポーズじゃないか！サトシの彼女はそれを東京で見るのか？」

聡　「……どこかは、知らない。第一、見てるかも分からない」

スティーブ「は？」

聡　「彼女の３０の誕生日が今夜零時なんだ。俺は約束したんだ。もし３０になって彼氏が出来てないなら、プロポーズするって」

スティーブ「だからその彼女はどこ？」

聡　「……どこにいるか知らないし、連絡の仕方も分らない」

スティーブ「えーっと、最後に会ったのは？」

聡　「十五年前、中二の時」

スティーブ「……（頭を抱える）サトシ、お前はおかしい。現実を見ろ」

聡　「分ってるよ。けじめなんだ。俺は彼女への思いを今夜捨てに来たんだ。この日この時間、東京上空を通るミッションだと知ってて、俺は志願したんだ」

スティーブ「……まさか、ワンチャン行けるとか、思ってないよね？」

聡　「……（首を振る）」
スティーブ「ホントか？」
聡　「……（あきらめきれずに首を振る）」
スティーブ「サトシ」
聡　「今から焼却投棄パックに入れる。零時丁度に落とす。大気圏内で燃え尽きて、俺の金色は灰色になるのさ」

○投棄パックの中に混入させた指輪

ハッチが開き、真下に地球が見える。
T　「真下に落ちる流れ星」

○十五年前、田舎の県、雨の降る中学校

T　「十五年前　六月」

○同、教室（外は雨）

聡（14）NA「灰色が金色になった瞬間を、見たことがあるだろうか。俺はある。それは俺の人生に閃いた、一撃の稲妻だったのだ」

転校生、凪（13）が紹介される。
黒板に書かれた「下原凪」の字。
聡、彼女の美しさに衝撃を受ける。
凛とした背の高い彼女は、都会的で、大人びた美人だ。
ぽーっとなる聡はじめクラスのみんな。
凪　「下原……凪です（ぺこりとする）」
先生　「高野。隣の席空いてるだろ。面倒みてやれ」
聡　「……（まだぽーっとしている）」
先生　「高野？」
聡　「は、はい。……えっ」
凪が隣の空席に座る。
聡　「あ、はい。……えっ」
先生は授業の続きを。
凪は机を移動して、隣に。
凪　「まだないんで（教科書を見て）」

聡　「あ。……ああ、ああ」
慌てて自分の教科書を、机と机の間に。
さかさま。直す。
聡のノートには、授業と関係ない計算式や数値計算が、真っ黒に埋まっている。
凪　「（それに気づく）」
聡　「あ。……マックホルツ第一周期彗星の軌道」
凪　「？」
聡　「俺天文部なんだ。宇宙飛行士目指してんの」
凪　「……」
聡　「（早口で）太陽の重力だけで計算するから予測がずれるんだ。木星の影響を考慮して、三体問題で解けば精度は上がって……」
先生　「何喋ってんだそこ」
凪、立って報告。
凪　「……私がトイレの場所を聞いてたんです。自己紹介で緊張してたので。行っていいですか」
背筋がきれいで堂々としている。
先生　「お、おう。……どうぞ」
凪　「（聡に）地図書いて？」
聡、慌ててノートに書いて破って渡す。
凪、優雅に教室を去る。
聡　「……（ただ見送るのみ）」

○休み時間、教室（外は雨）

さっそく皆に囲まれ、質問攻めを受ける凪。
野々宮（１４）「ねえねえ凪ちゃん神奈川のどこから来たの？　家近い？」
と慣れ慣れしく語りかけながら、隣の聡の椅子に、半ケツを滑りこませる。
聡　「ちょっと……」
野々宮「いいじゃん。ゴメン。（すぐ凪に向かい）俺野々宮日馬。ていうか、仲良しに

なろうよ！　みんなで今日歓迎会やろう！
カラオケとか好き？　え、何が好きなの？」
凪　「……」
　机の上に文庫本を置く。黒いカバーがついていて、中身は分らない。
野々宮「本好きなんだ！　スゲエ！　小説？
　なんとか殺人事件みたいなやつ？」
祥子（１４）「日馬、小説はみんな殺人事件
　だと思ってる？」
　どっと笑うみんな。野々宮グループの、
　ユウ、トキヤ、マリ、ナルミ（１４）
祥子　「凪ちゃん美人だね？　ウチらと仲良
　くしてよ」
聡　「……」
　その場に居づらく、席を立つ聡。
野々宮「（聡に）サンキュ！　（凪に）そうそ
　う、俺たち仲良しになりたいわけ！」
　祥子は野々宮の腕にまとわりつく。

○教室、六時間目終了のチャイム

　みんなカバンを出す。
野々宮「凪！　歓迎会行こうよ！」
祥子　「ウチらの溜まり場連れてくし！」
マリ　「とりあえずお茶しよ？」
凪　「……」
　それを眺める聡に気づく。
凪　「教科書、ありがと……高野くん」
聡　「ああ。じゃ、下原さん」
　野々宮グループと共に帰る凪。

○放課後、天文部部室

　ひなびた部室。谷（１４）と聡の二人
　だけ。
　聡はノートＰＣをいじっている。
谷　「お前のクラス、スゲエ美人転校生来
　たんだって？」
聡　「もう噂届いてんのかよ」
谷　「二時間目には回って来たっつーの。

俺も見に行ってたし！」
聡　「来てたのかよ」
谷　「……（ニヤニヤする）」
聡　「何」
谷　「隣の席なんだろ？」
聡　「……おう」
谷　「……」
聡　「なんだよ」
谷　「ワンチャン付き合えるかも、とか思ってるだろ」
聡　「思ってねえし。ていうか、早速野々宮のグループとか入ったっぽいし」
聡、ノートＰＣに戻る。

○翌朝、通学路

聡、凪に声をかけるイメトレをしている。
聡　「（独り言）偶然じゃん、下原もこっち方向？」
聡　「（独り言）教科書っていつもらえんの？」
聡　「（独り言）世界三大流星群って知ってる？」
遠くに凪を見つける。
聡　「え」
凪、野々宮と手をつないでやって来た。
（だがいつも凪は無表情だ）
凪　「あ（立ち止まる）」
野々宮「（凪に）誰？」
凪　「同じクラスの」
野々宮「？」
凪　「高野くん」
野々宮「ああ。（聡に）何？」
聡の目は、二人のつないだ手しか見えない。
聡　「あ……いや」
凪　「あ、私たち、付き合うことになったので」
聡　「え？　……は？」

野々宮「いやー、手ェ早いよな俺！　困っちゃうわー！」

○教室、授業中

凪はすでに教科書を持っていて、机は離されている。
彼女の横顔を、聡は盗み見ている。

○放課後、天文部部室

聡　「ワンチャンは、机くっつけた時だけだったか……」
谷　「やっぱワンチャン狙ってたんじゃん」
聡　「まあ、あると思うじゃん」
谷　「ねえよ」
聡　「ラプラスの悪魔を信じろ。この世の全ての粒子の位置と運動量さえ分かれば、全粒子の運動は軌道計算できるんだ。それが運命だろ」
谷　「多体問題はカオスになって予測できねえってなったろ」
聡　「それはミクロの話だろ。マクロで考えりゃ流れは予測できんだろ。つまりそれが運命だ」
谷　「じゃあ、ワンチャンない運命が待ってるかもじゃん」
聡　「……」

ノートに、手計算の続きを書いていく。
と、扉がガラリと開く。
凪が立っている。

聡　「え」
凪　「あ。……いるかなって思って」
聡　「俺？」

凪、うなづく。聡は谷に勝ち誇った顔。
凪、黒いカバーの本を出す。

凪　「しぶんぎ座って、何？　この中に出てくるんだけど、イメージできなくて。……（天井に貼った全天球図を見て）この中に、ある？」

×　×　×

ＰＣのしぶんぎ座の検索結果。
天体観測器としての四分儀と、しぶんぎ座。

聡　「（ヲタクっぽく早口に）四分儀ってのは、北極星にこう当てて、緯度を測る船乗りの道具なのね。地図とこれと風向きで、マストの方向を決めたんだ。だから星座になったのは当たり前なんだけど、星座が８８に整理された時に消えて、今はもうない」

凪　「ない星座。それでか……」

聡　「でも、しぶんぎ座流星群の名前には残ってるよ。ちょっと待って」
聡はノートＰＣを叩き、自分の撮った写真を見せる。星座と流れ星。

聡　「このへんがしぶんぎ座」
マウスで線を結ぶ。

谷　「こいつ全部自分で写真撮ってんの。しかもすげえのは、地球の自転に合わせてんだぜ」

凪　「？」

聡　「夜って暗いじゃん。だから何分間かシャッターを開けっぱじゃないと星は撮れないじゃん？　でもその何分かで地球が動くじゃん」
星が軌跡を描いた写真。一方聡の写真は、地面側が動いている。

谷　「だから星を止めるために、カメラに自作モーターつけてんのこいつ。自転と逆に動くように」
地面のブレ。静止している星。

凪　「……成程」

聡　「あ」
流れ星の写真たちの中に、垂直に落ちる流れ星が写っているのを見せる。

聡　「『真下に落ちる流れ星』って、レアじゃね？」

凪　「そんなことあるの？」

聡　「天球３６０度ある中の、たまたま０度の時があればあるよ。偶然の偶然の偶然

で」
凪　「……うん。しぶんぎ座が分って、よかった。ありがとう」
本をカバンにしまって、立つ凪。
聡　「本、好きなんだ」
凪　「（うなづく）」
聡　「……あ。ここ、誰も来ないから、静かに本読めるよ？」
凪　「……」
聡　「あ。あ、別に、どこででも読めるか」
凪にラインが来る。
凪　「野々宮に呼ばれたんで、行くわ」
扉を開ける。
聡　「はあ、モテるやつらはいいよなあ」
凪　「（立ち止まって）別に、あの人を好きじゃないよ」
聡　「え？」
凪　「処世術。他の寄ってくる男、断りやすいでしょ」
聡　「……」
凪　「私、私を好きな男、嫌いなの」
微妙な笑顔の凪。笑うのが苦手な感じ。
聡　「……」

○オシャレなカフェ

トレイでみんなの飲み物を運んでくる祥子。
ユウ　「サンキュー祥子！」
祥子　「これユウの、これナルちゃんとマリ、あと野々宮くん」
野々宮「（凪に）どれ？」
凪、指さす。野々宮わざわざ立って凪の分を取ってあげる。
露骨にイチャイチャする野々宮。
祥子　「……」
マリ　「祥子、二人は付き合うって決めたんだから、切り替えてこ？」
ナルミ「うちら、結束力でナンボでしょ？」
祥子　「うん。そうだよね」

凪　「（祥子が見ているのに気づき、微笑む）」
祥子　「（微笑み返す）」

○（日替わり）放課後、天文部

ガラリと入ってる凪。
ＰＣを見てた聡と谷はびっくりする。
凪、二人を邪魔しないように端の席に座る。
凪　「……あのグループといると疲れちゃう。ここなら見つからずに本読める」
谷　「あ、お茶飲む？　ジュース買ってくるわ」
気をきかせてやったぜ、と聡に目で訴え、去る谷。
聡　「……（ＰＣを叩きながら、チラ見）」
凪　「……あ。迷惑？」
聡　「（首を振る）全然、ずっといていいよ。俺も、ここしか、居場所ないし」
凪　「……いい場所じゃん」
無言に戻る二人。聡、何を話していいかわからない。
聡　「……あの、天文部入ってもいいんだぜ！」
凪　「？」
聡　「部活、って言えば、簡単に呼び出されなくない？　本も読み放題」
凪　「……ナイスアイデア」
聡　「……あ、で、」
タイミング悪く、ジュースを買ってきた谷が帰ってくる。
谷　「……？」

○海

Ｔ　「七月」
ユウ　「一番乗り！」
トキヤ「つめてーっ！」
など、男子は真っ先に海に入る。

野々宮グループが遊びに来ている。
女子はパラソルの下。
祥子　「凪、水着似合ってる。カワイイよ」
凪　「あ、ありがとう。……祥子さんも」
祥子　「祥子でいいって言ってんじゃん」
凪　「……祥子」
祥子　「うん。それでいい。この夏はいっぱい遊ぼうね！」
凪　「あ……うん」
祥子　「あ！　日焼け止め塗ってあげるよ！　凪、色白いから焼けたら大変でしょ？　これフランス製のなんとかって成分入りのやつ！」
凪　「あ……ありがとう」
祥子　「はい背中向けて！」
背中を向ける凪。
祥子　「……（ほほ笑んで）」

○病院、外、夜

救急車のサイレン。
救急車の扉が開く。中から苦しむ凪。
濡らしたタオルが落ちると、凪の背中が真っ赤になっている。
凪　「（救急隊員に）大丈夫です、歩けるんで……」
救急隊員「中から熱くなってきたら危ないから、ちゃんとお医者さんに言って！」
付き添う野々宮と祥子。

○教室、休み時間

祥子　「だからほんとにゴメンって言ってんじゃん。フランス製のアレが合わないって思わなかったし！」
野々宮「一生火傷の痕とか残ったらどうすんだよ！」
祥子　「でも大丈夫って言われてたでしょ？」
野々宮「……」
祥子　「凪が来たら直接謝る。それでいいで

しょ？」
後方の言い合いを、背中で聞く聡。
凪の休みの机を眺める。

○教室、授業中

凪、がらりと扉を開けて入ってくる。
祥子、野々宮たちと目を合わせる。
祥子、手を合わせて謝るしぐさ。
聡　「（小声）背中、もう大丈夫なの？」
凪　「（うなづく、小声）聞いたの？」
聡　「（小声）野々宮たちがケンカしてた。
わざとじゃないって」
凪　「（小声）……私もそう思いたい」

○校舎裏

野々宮、ユウ、トキヤに呼び出された聡。
聡　「え？　なんですか……何？」
野々宮「だからさ。俺はそうは思わないんだけど、みんなが言うんだ。凪をキミが狙ってるとかさ」
聡　「えっ……そんなことないですよ」
野々宮「そうだよな！　凪は俺と付き合ってるし、やっぱ被害妄想だよな！　よかったー！（肩を組む）」
聡　「……」
野々宮「あ、でもこの二人がさ、やんないとけじめつかないって言うんだよね」
聡　「？」
画鋲で左手の人差し指が刺される。
聡　「いって！　何？　えっ」
野々宮「俺は別にやりたかった訳じゃないんだけどさ、これから高野くんが凪好きになっちゃうかも知れないじゃん？」
聡　「え……だから、狙ってないし」
野々宮「その言葉が聞きたかったんだ！　ゴメンな！　絆創膏いるよな！」
野々宮は絆創膏を渡す。

○朝、下駄箱

凪　「……」
左右が逆にして置いてある。
周囲を見渡すが、誰もいない。

○次の朝、下駄箱

凪　「……」
今度は右だけない。

○教室、授業中

右だけスリッパを履いている凪。
聡から手紙が。
聡の手紙『なんで右だけスリッパなの？』
凪の手紙『なくした』
聡の手紙『なんで右だけなくすの？』
凪の手紙『なくしたから』
聡　「……」
自分の上履きを脱いで、右を渡す。
聡　「（小声で）貸す」
ためしに履くと、サイズが小さい。
聡　「（小声で）かかと潰していいから」
右だけかかとを潰した上履き。
右だけ靴下の、聡の足。

○放課後、天文部部室

聡　「なんかやべえ匂い感じるんだよ。凪、いじめられてんじゃねえかな」
谷　「誰に？　なんで？　スクールカースト上位にそんなことある？」
聡　「……美人すぎて恨まれることあるだろ」
谷　「あんの？　そんなこと」
聡　「……（首をかしげる）」

○朝一、下駄箱

柱の陰で監視する聡。

○翌日、朝一、下駄箱

柱の陰で監視する聡。

○翌日、朝一、下駄箱

柱の陰で監視する聡。

聡　「！」

祥子が凪の上履きを出している。

聡　「何やってんの」

祥子　「えっ。あ、やだ間違えちゃった」

聡　「なにそれ、いじめ？　嫌がらせ？」

祥子　「間違えただけって言ってるでしょ」

聡　「……本人に言おうか」

祥子　「何言ってんの。私と凪は仲良しよ」

聡　「やっぱり凪のって知っててやってんじゃん」

祥子　「……（周りを見渡して）校舎裏、行こ？」

聡　「？」

祥子　「女の子のオッパイ、見たことないでしょ。見せてあげる」

聡　「は？」

だが聡は祥子のオッパイから視線を外せなくなる。

祥子　「（にやりと笑う）」

○校舎裏

ブラウスのボタンを外して、ブラの谷間を見せる祥子。聡、生唾を飲み込む。ブラをめくり、乳房を見せる祥子。

（背中側からで、もろには見せない）

祥子　「……どう？　いいでしょ？」

聡　「（ただうなづくのみ）」

祥子　「触っていいよ。揉んだことないでしょ、生乳」

聡　「(おそるおそる触る)」
祥子　「やわらかく揉んで」
聡　「(揉む)」
祥子　「……そう。……上手。……あっ（つい感じてしまう)」
聡　「……」
突如我に返り、気持ち悪くなってその場を逃げ出す。
祥子　「あ！　ちょっと！」

○夕焼け、自転車で走る聡

ただただ自転車を漕ぐ聡。
全速力で漕ぐ。
息が切れて止まる。
左手の絆創膏。右手の感触。
聡　「あーーーーー！　あーーーーー！」
と叫ぶことしか出来ない。

○放課後、天文部部室

聡　「俺、決めたよ谷」
谷　「なんだよ」
聡　「野々宮に振られた元カノの遠藤祥子は、仲良しの振りをして下原に嫌がらせをしている。女同士の醜い争いだ。俺は姫を陰ながら救う、真の騎士となる。いわば忍びだ」
谷　「ナイトとニンジャ、どっちだよ」
聡　「だから影のヒーローだよ」
谷　「だからどれだよ」
聡　「協力しろ、相棒」
谷　「？」

○歩道橋

グリーンのエアーマットを持ってくる聡と谷。歩道橋の階段下に設置。
グリーンのじゅうたんを、階段に設置。
小さなカメラをいくつかセットする。

メインカメラを三脚にセットし、エアマット脇に置く。

×　×　×

回想、天文部。

聡　「カメラの電波の距離は短い。バッテリーが貧弱でな。お前は通行人のふりをしてカバンの中に受信側のＰＣを入れとくんだ。カメラは最悪壊されても、ＰＣに動画は保存される。幸い、隣のクラスのお前は、面が割れてない」

谷　「お……おう」

聡　「恩に着る。ラーメンおごるぞ」

谷　「チャーシューメン味玉ニンニクマシでな」

聡　「全部入り餃子セット、チャーハンもだ」

×　×　×

知らずに歩道橋を渡る祥子。

後ろからつける聡。

下のカメラ脇には、カバンにＰＣを入れた谷。

何も知らずスマホを見ながら歩道橋を歩く祥子。下り階段の前。

祥子　「？」

グリーンの仕掛けに気づく。

聡、後ろからドンと突き落とし、逃げる。

祥子　「ぎゃあああああ！」

グリーンの階段を転げ落ち、エアマットに顔面から着地する祥子。

祥子　「？？？」

顔を上げる。谷と目が合う。

蛇に睨まれた蛙のように、谷は固まる。

カメラに気づく祥子。

祥子　「何これ！　ドッキリ？　いたずら？」

カメラを蹴り倒す祥子。

通行人のふりをしながら、その場から去る谷。

○聡の部屋、夜

動画からグリーンでマスクを切り、転げ落ちる祥子だけを抜き出す聡。
動画に写っている、逃げる自分。これを誰も写っていない歩道橋（空舞台）で消す。
最後に歩道橋全体の空舞台に、転げ落ちる祥子を乗せて合成。
下手コラだけど、「祥子は歩道橋を転げ落ちるが、無傷で、立ち上がりざまキッと見る（本当は谷を見てるだけ）」
動画が出来上がる
聡　「……うむ」

○翌朝、通学路

道行く生徒が、祥子を見る。
女生徒「あー！　あの人！」
などの声も漏れ聞こえる。
祥子　「……？」

○同、教室

ユウ　「来た！　アクション女優！」
祥子　「は？」
トキヤ「お前斬新すぎんだろ！　アレ、マジでやったの？」
祥子　「何が？」
マリ　「再生数パネエよ！」
祥子　「は？」
スマホで動画を見せてくれる。
「ＪＣアクション女優爆誕」とあり、歩道橋を転げ落ちて無傷で立ち上がる祥子が。
祥子　「え……あ……？」
フラッシュ。小型カメラ。
野々宮「お前スゲエスキル持ってんな！　知らなかったよＪＣユーチューバーとは！」
祥子　「あ……うん……」
無傷で転がる祥子の動画。

再生数はどんどん伸びていく。

○動画第二弾

同じ転げて起きる祥子が、今度は「火山で転がって起きる動画」として再合成され、拡散。

○動画第三、四、五弾

砂丘を転がる、南極の氷を転がる、サーフィンのように巨大な波を転がる、と、次々と合成されていく。

○朝、教室

注目を浴びる祥子。

○朝、通学路

女の後輩「あの、いつも動画見てます！　チョーカッコいいです！」

祥子　「……なにこれ？」　恥ずかしがって逃げていく後輩。

○動画第六弾「アクション女優の素顔」

隠し撮りされた祥子の日常の映像。しかしめっちゃ綺麗に加工してある。

○朝、通学路

女の後輩「センパイ、好きです！」

男の後輩「俺と付き合ってください！」

祥子　「……なんなのこれ！」

○動画第七弾「ＪＣアクション女優と上履き」

下駄箱を開ける祥子の盗み撮り。

大量の上履きがあり得ないほど出てく

る（クソコラ合成）。
歩いている祥子の盗み撮り。上履き（合成）たちが一緒に列をなして歩く、シュール映像。
笑って誰かの肩を叩くシーンなのに、上履きが襲って叩き落とすようなアクションシーンになっている。

○朝、下駄箱

スマホでその動画を見る祥子。
祥子　「あいつしかいないよね、上履きを知ってるの。……偶然？」

○休み時間、教室

イケメンの鷺宮（15）がやってくる。
鷺宮　「ここに祥子さんっている？」
女子たちがキャーキャーいう。
鷺宮　「ちょっと話してみたいんだけど」
ナルミ「祥子、行きなよ、鷺宮くんだよ！」
祥子　「……」
廊下に出て話す二人。
壁ドンされる。
女子たちキャーキャーいう。

○翌朝、下駄箱

凪　「……」
上履きは何もされていない。
周囲を見渡す凪。とくに誰もいない。

○放課後、天文部部室

大爆笑する聡と谷、ハイタッチ。
聡　「谷にも見せてやりたかったわ！　遠藤、メスの顔になってんの！」
谷　「斬新すぎる復讐だろ！　普通傷めつけるとか脅迫するだろ！　何アクションヒーローに仕立て上げてんだよ！」

聡　「だから俺が真のヒーローなんだよ！
憎しみは何も生まない。復讐の螺旋に巻き込まず、その螺旋からいち早く抜けさせる。
これぞ成仏」
谷　「途中から仏教入ってんじゃねえか」
聡　「南ー無ー（合掌）」

○カフェ

みんな喋っている中、凪は一人離れて本を読んでいる。
野々宮「祥子、来ないの？」
マリ　「こっちよりいい男の所」
ユウ　「言うね」
トキヤ「（スマホを見せて）○○中のやつらが『遊ぼう』って」
ユウ　「またカワイイ子連れて来いって返せよ」
ナルミ「イケメンもよろしく」
トキヤ「（スマホに着信）え、マジか。ＪＫ来れるってさ」
野々宮「年上。いいじゃん」
ナルミ「年上のイケメンは？」
ユウ　「こっちは美人の新人入ったって言っとかないとな」
凪　「……」
横目でそれを見ている。

○（日替わり）放課後、天文部部室

聡　「ていうか、何で急に入部希望者増えたの？」
部室に入りきらない生徒たち。
谷　「……ウチが夏休みに合宿やるって漏れたんでしょ」
聡　「？」
谷　「下原さんと旅行行けるチャンス」
聡　「……不埒な。なんと不埒な」
おおおと声を上げて、道を開ける入部希望者たち。凪が立っている。

凪　「……？」
×　×　×
聡　「えー、明後日から夏休みですが、ウチの合宿は毎年〇〇山で、ペルセウス座流星群を観測します！」
拍手するみんな。
聡　「谷、世界三大流星群は」
谷　「ペルセウス座流星群、双子座流星群、しぶんぎ座流星群」
聡　「その極大期、つまりピークの日は」
谷　「８月１２日、１２月１４日、１月３日」
聡　「その８月１２日俺たちは〇〇山だ！」
ウエーイと盛り上がるみんな。
谷　「ちなみに俺の誕生日な！」
みな、しんとなる。
谷　「……あれ、滑った？」
凪、小さく手を挙げる。
凪　「あ、それでいうと」
みんな注目。
凪　「私の誕生日と一日違い。……１月３日のしぶんぎ座流星群と」
みんな「おしい！」
などと盛り上がる。
聡　「１月４日？」
凪、うなづく。
聡　「じゃあビンゴだ！　１月３日の夜から４日朝にかけてがピークだし、つまり、年齢が変わる瞬間、流星群が祝福してくれるぞ！」
みんな「おおおおお」
谷　「いや、俺もなんだけど」
聡　「なんで流星群は毎年同じ日に見えるか分る？」
凪、手を挙げる。
凪　「季節と関係あります？」
聡　「いいね！　地球はぐるぐる太陽の周りを回ってるよね？　軌道上の同じ場所に、流星のモトがあるんだ。チリとか氷の集団だね。毎年ここに地球が突っ込む。引力に

引かれた奴から順番に流星になる」
凪　「ペルセウス座……からやって来たチリ？」
　　天井には天球図。
聡　「惜しい！　地球から見て単にペルセウス座方向から来るだけだね。これに関しては、スイフトタットル彗星がまき散らし犯人って分ってる。周期が１３３年、その通過あとに、宇宙船地球号が突っ込むのさ」
凪　「へえ……」
みんな「へえ……」

○夏の風景、電車が走る

T　「八月」

○山の中、深夜、ペルセウス座流星群

　凪の周りは新入部員たちが固めて、聡の入る余地がない。
　聡は不満そうに、自作観測マシンを組み立てる。デジカメの下に回転台がついていて、ノートＰＣに接続されている。方角を見て、カメラをセット。
聡　「一時間露光、３０分露光、１０分露光、３分露光とテストしたいんだよね」
谷　「……残念だったな。姫と喋れなくて」
聡　「……別に」
　　空に流れ星が流れるたびに、皆わーきゃー言う。
聡　「そんなんで朝まで持つかよ、素人が」

○帰りの電車、内

　全員寝ている。
　ノートＰＣを抱え込んで寝ていた聡、ふと目覚める。
　隣のボックス席の凪と目が合う。
　二人以外、全員寝ている。
　凪は黒いカバーの本を読んでいた。

聡　「……」
凪　「……」
聡　「なんか、全然喋れてないね」
凪　「うん」
聡　「野々宮たちと、うまく行ってる？」
凪　「……多分。時々、遊ぶ」
聡　「なにして？」
凪　「……」
聡　「？」
凪　「いろいろ」
　聡、ノートＰＣの、出来上がった写真を見せる。
凪　「こんな風に写るんだ」
聡　「（窓の外を見て）今は太陽の光で見えないだけで、こうしてる間にも流れ星は降り続けてる」
凪　「……そんな風に考えたことなかった」
聡　「大人の言うことってすぐにひっくり返るじゃん。だから、絶対正しいことを知りたい」
凪　「……なんか、分る」

○教室、授業中

Ｔ　「九月」
　凪、休んでいる。
聡　「……」

○夕方、凪のアパートの前

聡　「（独り言）やあ。なんか最近見なくて、心配でさ」
聡　「（独り言）プリント、持ってきた。ノートのコピーも」
聡　「（独り言）夏合宿の写真、見る？」
　中で母親（千代子）と喧嘩している凪の声。扉が開く。
千代子（４０）「待ちなさい！　凪！」
　凪は涙目で、真っ赤。
凪　「……」

聡　「あ……プリント」
凪　「……ありがと」
　　ポストに入れて、走り去る。
聡　「（独り言）お前、ナイトだろ」
　　彼女を追いかける。

○夕方、土手

　　二人は所在なげに座っている。
凪　「ごめん、変なところ見せちゃって」
聡　「いや、やっぱお父さんとお母さんが仲悪いのはショックだよな。家庭環境ってやつ？　このままじゃ娘が不良になってしまうよな」
凪　「もう……なってたりして」
聡　「なってるの？」
凪　「（曖昧なほほ笑み）……あのさ」
聡　「何？」
凪　「やっぱいいや」
聡　「何？」
凪　「星の話、して」
聡　「……どの星の？」
凪　「なんでもいいから」
聡　「え、……じゃ、宮沢賢治も大好きだったオリオン座の、ベテルギウスの話」
凪　「それ」
　　必死で話す聡。
　　ただ笑って聞いている凪。

○夜、凪のアパートの前

凪　「ありがとう。現実に向き合う勇気、出た」
聡　「完璧美人に見える下原でも、勇気出ないことあるんだ」
凪　「……みんな顔の話ばかりする。たかがツラ一枚のことなのに」
聡　「あ、えっ、ごめん気にしてたんだ」
凪　「私がこの顔じゃなかったら、違う人生だったのに」

聡　「え。……どういうこと？」
凪　「ごめん。忘れて。今日はありがと」
　　扉を開けて、中に入る。

○（日替わり）放課後、天文部部室

　　聡と谷の二人の天文部に戻った。
谷　「……なんか、元に戻ったな」
　　聡、窓の外を見る。
　　窓の外に、野々宮グループたちがどこかへ出かけるところ。
　　凪は野々宮と話しているが、表情が暗い。
　　聡、胸騒ぎがして、カバンにＰＣを入れる。
聡　「今日は帰るわ」
　　一方、地上の凪。
　　天文部部室を見る。
　　窓には誰もいない。

○ラブホテル、前、夕方

　　凪、野々宮、マリ、トキヤ。
　　高校生の男女。
高校生男「（凪を見て）写真よりかわいい」
凪　「……」
野々宮「やっぱ美人とイケメンが集まって楽しくやらないとね！」
高校生女「こっち２人で、特にカップルじゃないけどいい？」
野々宮「勿論！　今日は６人で遊びましょう」
　　笑うマリ。隣の凪。
高校生女「最近のＪＣマジやべえな」
高校生男「お前も中学生と３Ｐ狙いで来たくせに」
　　それを物陰から観察している聡。デジカメで彼らにズームするが、何を言ってるかまでは聞こえていない。
　　指の動きを見てアフレコする。
聡　「（独り言）好物はスイカです」

聡　「（独り言）マジ２個一気食いできるね」
聡　「（独り言）俺は６個だ」
聡　「……なわけ、ねえよな」
　高校生男、凪の腕をひっぱり、強引に連れ込もうとする。
凪　「嫌」
野々宮「優しくしてあげてくださいよ。怖がられちゃ、楽しくないでしょ」
高校生男「そりゃそうだ。ごめん、６Ｐとか初めてでさ。緊張するわ」
　６人、ホテルに入っていく。
　フラッシュ。凪の口元のアップ。
聡　「いや。……『いや』、だよな」
　聡、考える。必死で考える。
　ラブホテルの入り口にダッシュ。
　外から見えるパネル。二人用、大部屋などが見える。大部屋はひとつランプが消えている。
聡　「ハア……ハア……ハア……（肩で息をする。考える）」
　フラッシュ。凪の「いや」という口。
　聡、ダッシュ。

○ラブホテル、大部屋

　凪、制服のまま高校生男に組み敷かれる。
高校生男「ねえ、どこがいいの？　彼氏に見られながらが好きだって？」
　既に周りは、大きなベッドの上で、脱いだりまさぐりあったりしている。
凪　「……」
　諦めて体の力を抜く凪。
高校生男「動画撮ってもいいんだよね？」
マリ　「私のスマホ限定、三分まで、顔写ってたら消すルール。クラウドに上げたら児ポバレるから、ローカル保存で」
　次第に、女たちの喘ぎが部屋を満たしていく。

凪、天井を眺める。
宇宙の柄の壁紙。
凪　「……いや」
高校生男「何？」
凪　「……いや。いや！」
高校生男「え、ここにきてダメなの？」
凪　「（首を振る）」
高校生男「もうやってるんだから、認めたってことでしょ？」
凪　「……（首を振る）」
高校生男「そういうプレイなの？」
凪　ブラウスを脱がせる。
凪　「（宇宙を見ながら暴れる）」
と、火災報知器が鳴り響く。
みんな「え？　何？　びっくりした！」
凪、その隙に男を蹴飛ばし、逃げる。

○同、裏口、夜

裏口でボヤが起こっている。
聡　「あ、こっちです！」
警官、消防士たちを誘導する聡。
彼らが消火を始めたら、ポケットの中の百円ライターの指紋を拭き、どこかの家の庭に捨てる。
ラブホテルの利用客が非常口から出てくる。
その中に、ブラウスを羽織った凪。
ボヤの火に照らされた顔。泣いている。
聡　「あ」
凪　「……何で、いるの？」
聡　「……」
凪の手を取り、その場から走って逃げる。
煙に巻かれて出てきた野々宮たち。
野々宮「あー……なんか、潮時かな……」

○夜、土手

二人、座ったまま無言。

凪　「……家、帰んなきゃ。不良娘は」
聡　「……なんかあったんだろうけど、聞かないし、誰にも言わないし」
凪　「……うん」
　　凪、立つ。
凪　「高野。……私を殴って」
聡　「え？」
凪　「私のこの顔が悪いのよ。ボコボコにして。変な顔にして。ニヤニヤされない顔にして」
聡　「え」
　　聡、立つ。
聡　「……」
　　平手で頬をぺしり。
凪　「男でしょ？　男の力でやってよ！」
　　聡、平手でぺしり。
凪　「誰かに所属しない生き方が、できるようになりたい」
聡　「……」
　　聡、平手で張る。
凪　「グーで来て！」
　　ポコッと殴る。
凪　「足りないよ！　全然足りない！」
　　ポコッ、ポコッと殴る。
凪　「本気でやってんの？」
聡　「……」
　　決意して、一発デカイのを。
　　鼻血が出てくる凪。
凪　「いい！　いいよ！　もっと！　もっと！」
　　聡、殴る。凪、泣いている。
　　聡、訳も分らず殴る。
　　凪の血と涙は混じってゆく。悲しさと笑みも混じってゆく。

○授業中、教室

　　凪は休み。
　　聡はずっと机を見ている。
T　「十一月」

○放課後、天文部部室

谷　「あー、なんで下原さん来ねーんだよー。やっぱ美人がいねーとつまんねーよなー。聞いてる？」

聡　「……知らねーよ」

がらりと開く扉。

野々宮が立っている。

野々宮「ちょっと今話せる？」

聡　「……」

野々宮「俺、凪と別れることにしたんだわ」

聡　「は？」

○校舎裏

野々宮「凪に言うの止められてたんだけど、アイツんち、引っ越すって」

聡　「え」

野々宮「あそこの両親仲悪くて、離婚するんだってさ」

聡　「……は？」

回想。母と喧嘩して、扉から出てきた凪の涙目。

野々宮「で、別れるわ。東京の方戻るらしいし」

聡　「え？　何、その程度な感じ？」

野々宮「何が」

聡　「愛とか……あるじゃん」

野々宮「あるけど、そんなもんだろ恋愛なんて」

聡　「そんなもん？（納得いかない）」

野々宮「わざわざ言いに来たのはさ、覚えてんだろコレ」

画鋲を出す。

聡　「……」

野々宮「仕返ししていいよ。それでチャラにしてえんだ」

聡　「……」

手のひらの上に乗せられた画鋲。

針は下向き。
フラッシュ。凪を高校生に紹介していた野々宮。
バンと手のひらを叩きつける聡。
野々宮「……！」
聡　「チャラだな？」
野々宮「……おう」
聡　「教えてくれて感謝する。いつ引っ越すの？」
野々宮「年明けたらすぐだって」
聡　「……」
いても立ってもいられず、走り出す。

○夕、凪のアパートの前

聡　「下原！　下原！　下原凪！　俺！
高野聡！」
窓に叫ぶ聡。
凪が顔を出す。
聡、最初に計算していた真っ黒なノートを見せる。凪、窓を開ける。
聡　「あ、顔、変形するほどじゃなかったね！」
凪　「（笑う）高野が意気地なしだったからね」
聡　「……」
凪　「……」
聡　「……引っ越しのこと、聞いたよ」
凪　「親と喧嘩してさ。不良と付き合うなら閉じ込めるぞって。丁度よかった。外に出たら、私ダメになる」
聡　「本読めるチャンスじゃん」
凪　「……そうだね」
聡、ノートを見せる。
聡　「この計算、覚えてる？　手計算だから合ってるか分んないけど、つまりこれは、今年が当たり年だってこと！」
凪　「なんの話？」
聡　「しぶんぎ座流星群！」
凪　「……」

聡　「日付が変わった誕生日、ここに迎えに来る。一緒に見に行こうぜ。流星群の写真を撮ってプレゼントする。みんなが寝静まったあと、その部屋を抜け出すんだ」
凪　「（うなづく）」
聡　「スゲー寒いから防寒具マシマシで！」
凪　「（うなづく）」

○夜、聡の部屋

すごい手計算をしている聡。
ノートＰＣでも数値計算プログラムが走っている。

○深夜、凪のアパート前

着ぶくれした凪がこっそり出てくる。
自転車に機材積んだ聡。
聡、紙切れのメモを見せる。
メモ　『しずかに』
凪　「（うなづく）」
聡、メモを裏返す。
メモ　『誕生日おめでとう』
凪　「（うなづく）」
音を立てないように、二人はそれぞれ自転車で走り出す。

○郊外の道、深夜、雨

雨合羽で自転車を漕ぐ二人。
雨風がきつくなってきた。
凪　「このあと晴れるの？　本当に？」
聡　「気象庁なめんなよ！　雨雲レーダーの正確さは俺の計算よりスゲエんだよ！」
だが道のギャップに乗り上げ、聡は自転車ごとひっくり返る。
×　×　×
聡　「ああ、なんだよ！　モーターもカメラも立ち上がんないのかよ！　おまけにこいつ（自転車）まで！」

凪　「……森まで、まだあるよね」
聡　「……写真は諦める。肉眼で見て、心に焼き付けよう。それでいい？　誕生日プレゼント」
凪　「外に出してくれた。それだけで、わくわくしてる」
聡　「貸して」
　凪の自転車の籠に機材を入れる。
聡　「後ろ乗って。死ぬ気で漕ぐ」
　二人乗りで森へ。

○深夜、森の中

凪　「……晴れてきた。マジすごい気象庁」
聡　「今夜は新月だし、余計な光がなくて最高の環境だぜ」
　凪、ビニールシートを広げて座る。
　二人分にはやや狭いが、凪は半分空けて手招きをする。
　聡、ドキドキしながら座る。
　流星群はすでに始まっている。
　ポットに入れたコーヒーを、二人で分ける。
聡　「あの辺が放射点のはず」
凪　「なにそれ」
聡　「この方向に地球がまっすぐ向かってるわけ。だからここから放射状に流星が飛ぶように見える。俺たちが雲の中に突っ込んでいくイメージ」
凪　「地球が突っ込んでいくから流れ星が落ちるって、考えたこともなかった」
　流星群たち。
凪　「私のことを誰も知らない星に行って、そこで結婚したい。それか、私の嫌な所も悪い所も全部知ってる人」
聡　「……」
凪　「私このままちゃんと結婚とかできないと思う」
聡　「下原なら大丈夫だよ。いい彼氏見つかるよ。でも３０になっても一人だったら、

俺が貰ってやる」
凪は答えない。
その時、真下に流れ星が落ちた。
聡　「えっ！　あ！　見た？　今の！　真下に落ちた！　この３６０度の中の０度！　スーパーレア！　運命じゃん！　この日俺たちがこれを見るのは、運命だったんじゃん！」
凪　「……」
聡　「……（突如、緊張する）」
凪　「？」
聡　「あの、……俺、君が好きだ」
凪　「？」
聡　「ずっと好きだった。ギリギリになるまで言えなかった。でも言う」
凪　「……（急に冷たい目に）」
聡　「？」
凪　「同じなの？」
聡　「？」
凪　「高野も、他の男の人と同じなの？」

○（現在に戻って）国際宇宙ステーション内

スティーブ「……で、何て答えたんだ？」
聡（３０）「何も答えられなかった。俺は野々宮みたいな陽キャでもイケてる軍団でもないし、『君に性欲を感じている』と思われてると思ったら、ぞっとして、何も言えなかったんだ……あそこで、」

○（前のシーンの続き、妄想）

凪　「高野も、他の男の人と同じなの？」
聡　「違うよ。俺は君の心を愛しているんだ」
凪　「え？」
聡　「『ここと違うもうひとつの世界がある』って、君も僕も信じてる。君は本の世界。僕は星の世界。そこが二人の共通点だ」

○（元に戻って）国際宇宙ステーション内

聡　「なあんて言えば、また違う世界線にいたよなあ。……中坊でそんなこと言うの無理だよな」

スティーブ「（ため息）その話は、それで終わりか？」

聡　「もうちょっとだけ、続きがあってさ」

○（再び十五年前）駅のホーム

凪と母。

見送るのは、野々宮、祥子と鷺宮、谷。

そして天文部の沢山の男子たち。

凪　「……じゃ、時間なんで」

谷　「……（聡が来ないので、イライラしている）」

○聡の部屋

机に突っ伏して寝ていた聡、飛び起きる。

ノートにものすごい計算の跡。その鉛筆の黒が顔についている。

聡　「やっべ！」

横断幕がある。空白の部分に慌ててマジックで書き足す。「２０３６」の文字。

○駅のホーム

発車ベル。

凪、乗り込んで、遠くを見る。

みんな、手を振る。

谷　「遠藤のアクション女優動画作ってたの、高野だから」

凪　「……じゃないかと思ってた」

扉、閉まる。動き出す電車。

○海沿いの線路

聡、自転車を必死で漕ぐ。
かごに横断幕を積んだまま。
電車が走ってくる。

○電車の中

凪、走っている聡に気づく。

○海沿いの線路

聡　「凪！　凪！　凪！」
自転車ごと、海に転落。
横断幕が海に広がる。
横断幕『次のしぶんぎ座流星群の当たり年は、２０３６年』
海の中から顔を出す聡。
聡　「凪！　凪！　凪！」

○（現在に戻って）宇宙ステーション内

窓の外の流星群。
聡　「それが今年、そして今夜零時が、彼女の３０の誕生日。だから俺はプロポーズするんだ。東の空に、真下に落ちる流れ星で」
スティーブ「彼女が見てるとも分らないのに？」
聡　「……ああ」
スティーブ「（こりゃ駄目だと思う）」
と、振動。警報。
電気が暗くなり、アラートランプがつく。
聡　「何だ？」
ハンス（３５）が呼びにくる。
ハンス「スペースデブリが衝突！　レベッカの回避計画が甘かった！　七番パネルにヒット、外へ出て、直接修理しないと！」
スティーブ「予備電源は？」
ハンス「三時間は持つ」
聡　「……俺が行くよ」

スティーブ「サトシ」
聡　「スティーブもハンスも、まだ実験の途中だろ。リザーバーでミッションに参加してる俺が余ってる。こういう時の為のリザーバーだろ」
スティーブ「……」

○ステーションの外、宇宙空間

宇宙服で船外に出る聡。
スイッチを入れると電磁石がオンになり、外壁に吸い付き、それで伝ってゆく。
ひたすらガチャガチャとゆっくり進む。
地球は半分が夜。
しぶんぎ座流星群が、天空から降り注いでいる。
聡　「見ろよスティーブ！　俺の計算は間違ってなかったろ。今頃日本では、天文部の中学生が天体観測しながら告白とかしてるぜ」
スティーブ（無線、以下同）「特等席を独り占めしやがって。七番パネルは？」
聡　「いけそうだ。俺一人でなんとかなる」
手元の工具で修理をはじめる聡。
×　×　×
凪との思い出が、自然とあふれてくる。
涙目で扉を開けて出てきた凪。
ボヤの火で照らされた凪。
殴ったときの顔。
×　×　×
最後のボルトを締め終える。
聡　「ＯＫ。これでお前ら実験し放題だぞ。もとに戻った」
スティーブ「最高だぜサトシ。お前は俺たちのヒーローだ。真のアストロノーツだ」
聡　「ああ。……俺、ほんとに宇宙飛行士になったんだなあ……。あ」
スティーブ「どうした」
聡　「いま日本時間は？」

スティーブ「……零時を三分過ぎた。残酷なようだが、我らが国際宇宙ステーションは、日本上空を過ぎ、中国大陸へ向かっている」
聡　「……」
スティーブ「帰ってこい。一杯やろう」
聡　「宇宙酔いも、悪くねえか」
聡、再び外壁を伝い、一歩一歩戻る。
聡　「……」
振り仰ぐと、地球に流星群が落ちている。
遠ざかる、宝石箱のような夜の日本。
聡　「スティーブ、投棄ボタンを押してくれ。忘れたい」
スティーブ「ラジャー」
投棄口から捨てられる、投棄パック。
大気圏で燃え始める。
聡　「グッバイ、俺の青春」

○その少し前、凪（２９）の部屋、夜

引っ越してきたばかりの部屋。
荷物を開ける凪（２９）、最低限のセッティングをしている。
机、ＰＣ、本棚、大切な本。
新しい本に、黒いカバーをつける。
凪ＮＡ「その後私は東京の出版社に勤めて、３０を前に独立して翻訳業を始めた。新潟でテレワークするスタイルだ。東京に一本で出られるし、何より雪の静けさが好きだし」
窓の外には、一面の雪。
凪ＮＡ「神様がいるかどうかは分らない。でも今夜起きた二つの偶然は、きっと神様のせいだ。一つ目は、宇宙ステーションにスペースデブリが当たったこと。二つ目は、新潟の不動産屋が、西向きの部屋を私に勧めたこと」
一人でワインを開ける凪。
凪　「３０のワタシ、おめでと。あと、独立おめでと」

時計はまさに０時３分。
何気なくベランダに出て雪を眺める凪。
その空に、真下に落ちる流れ星。
凪　「え？」
まっすぐな残光が、ゆっくり消えていく。
×　×　×
聡との回想がフラッシュバック。
アパートに来てくれた聡。
殴ってくれた夜。
二人乗りで星を見に行った夜。
はじめて会った時のこと。
聡　「俺、宇宙飛行士目指してんの」
×　×　×
部屋へ戻り、「高野聡」を検索。
ネット記事「日本人宇宙飛行士高野聡、ＪＡＸＡより国際宇宙ステーションに合流」
宇宙飛行士の制服を着ている聡の写真。
凪　「夢、叶えたんだ……」
ベランダへ走る凪。
空を探す凪。
空を探す凪。

○地球に落ちていく指輪

スローモーションで、指輪が燃えて、流れ星になり、燃え尽きるまで。
投棄パックは真っ赤に燃えて、バラバラになってゆく。
その中に金色の指輪。
指輪は真っ赤に燃え、溶け、金色の光を放つ。
雲を抜ける。海面が近づいてくる。
金の光は消え、灰になって散ってゆく。
×　×　×
それにインサートする二人の場面。
上履きを貸してくれた聡。
二人で飲んだコーヒー。
天文部部室。
ノートＰＣの前で寝ている聡。

凪は彼の背中にもたれて、本を読んでいる。

聡ＮＡ「灰色が金色になる瞬間を、見たことがあるだろうか。俺はある」

○地上を見る聡、空を見る凪

暗転。